演劇の力で老舗商店街の思いを残す

大阪府大阪市西成区　無名劇団

「店を開けるんは、繋がりたいからや」

大正時代から続く「メガネの谷」は、今の主人の代で幕を閉じる。今回のお話は、西成の商店街で生き、街を見続けたお父さんと、そのまたお父さんの物語。

「人生は夢見てるようなもんや」親父は最後にそう言った。親父がはように亡くなって店を継ぐことになったんは、俺が二十歳になった頃。

店を開けた日の数だけ、思わぬ出会いがある。出会いの数は多い方がええ。親父が言うみたいに、人生が夢なんやったら、俺は多くの奴といろんな夢をみたい。

店が休みの日はライダー、平日の夜は週4でサックスの練習、たまにFMラジオのDJもやる。忙しいてしゃあない。ほな、きょうは・・・

大阪を中心に活動する若手演劇集団「無名劇団」（代表・島原夏海さん）による演劇「商店街連続ドラマシリーズ」の第4回「メガネの谷」編の公演が行われた。

この公演の舞台となった大阪市西成区の鶴見橋商店街は、東西1㎞にアーケードが続き、かつては、心斎橋筋・天神橋筋と並んで「大阪三橋」と称されるほど賑わっていた。しかし近年では高齢化が著しく、人出が減りシャッターが目立っている。一方、関西の演劇界では近年のコロナ禍で劇場閉鎖や公演中止が相次ぎ、上演や観劇ができず、担い手もファンも演劇界から離れている危機的な状況にあった。

「無名劇団」は鶴見橋商店街7番街の空き店舗を改修して、

2020年夏にアトリエを開設。代表の島原さんは「演劇を続けたい決意があり、自前のアトリエを持つことになった。以前は西成にネガティブなイメージを持っていたが、実際に活動をしてみると、器の大きい、人情のある町だとわかった」と話す。これまで演劇に縁のなかった人からも「この街のためによくぞやってくれた。街を思ってくれてありがとう」と声をかけられる。公演のポスターを店頭に掲示したり、時には差し入れをもらったりするそうだ。

コロナ禍で改めて浮き彫りになったのは、商店街も演劇もお客さんとの触れ合いが大切なこと。そこで、商店のご主人の話や息遣いを演劇で残せたらと考え、演劇の力で商店街と演劇界を活性化させようと企画したのが自主制作映画「ボンバイエ！」と今回の「商店街連続ドラマシリーズ」だ。

地域で、昔から商店を営む店主の実話をモチーフに、この町の文化や暮らしを演劇作品に起こして語り継ぐ。商店街に足を運ぶ方が鶴見橋商店街の魅力を知ると同時に、商店街の活性化にもつながる。今回の取り組みを通じて、演劇人の「創客」と「商店街の活性化」の両方をめざそうとした。

今年の商店街連続ドラマシリーズは全4回。餃子屋さん、うなぎ屋さん、自転車屋さん、今回の眼鏡屋さんを描く。作品を制作するうえで島原さんは「本人にインタビューで聞いたリアルな言葉から、人生で大事にしていることを演劇として残したい」と話す。

今回の公演の舞台となった「メガネの谷」の谷さんは、手ずり加工の技術を習得し、機械でできない微妙なレンズ削りをする。谷さんのお店には他で見たことがないような独創的

なフレームがたくさん並んでいる。目のことは何でも知っておこうと、ホルモン屋さんから目玉を仕入れて解剖したこともある。また、若い頃から多くの趣味を持ち、バイクに乗り、サックスを吹いていた。やがて家族やお店のことを考え、サックスは売り、バイクは原付に変えた。今では朝3時に起きて大阪の街をツーリングするのを日課としてお店を続けている。二十歳で店を継いでおよそ50年。谷さんはどんな思いで今を見つめているのだろうか。

谷さんと高校生の孫の会話シーン

「なんでお父さんは、おじいちゃんの後継いで、眼鏡屋さんにならんかったんやろうって」

「継いだかて、この古い商店街で生き残るん大変やがな」「あんたが生まれたころ辺りから、大きい店がようけ建って、いまはここらもシャッターだらけや。夕方なったら誰も通らんからみな店閉めよる。まあでも、それもしゃあない、これも世の流れや・・・。せやからおじいちゃんの代で、しまい」

谷さんと"死んだ親父"の会話シーン

「斜め向かいの空き店舗に若い劇団の子らが入って。その子らの自主映画っちゅうやつに出たんや！こないして店開けとったら、色んな思わぬ出会いがある・・・。親父、すまんな。俺の代で終わりなんや、店。守れんで、すまんな」

「何を言うてんねん。おおきに。おおきにな！」

【連絡先】
無名劇団（代表・島原夏海さん）
メール：info@mumeigekidan.net